〔資 料〕

本学部のカリキュラム評価
－6つの教育目標の到達度に関する第1回生の自己評価を中心として－

日沼千尋* 田中美恵子* 諏訪茂樹* 會田信子* 小笠原広実*
片桐康雄* 加藤登紀子* 菊池昭江* 久米美代子* 塚越フミエ** 眞嶋朋子*

THE CURRICULUM EVALUATION OF TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY, SCHOOL OF NURSING
- THE INVESTIGATION BASED MAINLY ON OUR FIRST ENTERED STUDENTS' SELF-EVERLUATIONS ON THEIR ACHIEVMENTS IN 6 EDUCATIONAL OBJCTIVES IN THE CURRICULUM -

Chihiro HINUMA*, Mieko TANAKA*, Shigeki SUWA*, Nobuko AIDA*,
Hiromi OGASAWARA*, Yasuo KATAGIRI*, Tokiko KATO*, Akie KIKUCHI*,
Miyoko KUME*, Fumie TSUKAKOSHI**, Tomoko MAJIMA*

要旨

本学部では、平成10年度に開設して以来、6つの教育目標に基づき教育活動を展開し、平成13年度に完成年度を迎えた。現状問題検討委員会ではこれまでの教育を評価し、特にカリキュラム改善の資料とするために、専任教員へのアンケート調査、および第一回生98名に対するアンケート調査を実施した。本稿では学生へのアンケート調査の結果について報告する。

1. 教育目標に対する学生の自己評価において、到達度に関しポジティブな回答が比較的多いのは目標1．3．5の「豊かな人間性を養い、生活者として人間を理解する」、「チーム医療において主体的かつ協調的に看護の役割を果たす」、「専門職者として自己の能力を評価し、自己成長の基盤を養う」であった。
2. 同様に、ポジティブな回答が比較的少なかったのは目標の2．4．6の「看護に必要な科学的思考や実践能力を養う」、「研究の基礎能力を養う」、「国際的な視野に立った活動の基礎能力を養う」であった。
3. 学生の多くは本学部での学習を通して、「看護への関心が高まった」「学習に意欲的に取り組めた」と感じていた。
4. カリキュラムの密度について、アンバランスで過密であるという回答が多かった。
5. 以上の結果から、看護の実践能力や研究能力を高めるための教育内容や教育方法の検討、カリキュラムの密度、開講時期等の検討、および教員の教育能力を向上するための研修や学内での教育に関する情報交換の場の設定など、多くの課題が示唆された。

キーワード：カリキュラム評価、到達度、教育目標、看護専門教育、看護学士課程

Abstract

Tokyo Women's Medical University , School of Nursing was established in 1998. It has developed educational activity based on six goals since then. As they celebrated 4th anniversary in 2001, Problem Investigation Committee of the university conducted survey on full-time faculty and 98 first -entered students in order to evaluate the present educational program and improve the curriculum. This paper reports the results of students'responses on the survey.

1.Students'self-evaluation on how far they attained educational goals showed relatively many positive responses in the following points; Goal No. 1.To cultivate human nature and understand people as those who are leading everyday life, Goal No. 3. To accomplish roles as a nurse subjectively and cooperatively in the team medicine , Goal No. 5. To evaluate own ability as a

professional and develop a foundation for self-improvement.

2.Relatively a small number of positive responses were collected in the following; Goal No. 2. To develop scientific thinking skill and executing ability which are necessary in nursing, Goal No. 4. To develop basic ability for research, Goal No. 6. To develop international point of view.

3.Most students felt that they became very motivated and concerned with nursing through their studies in the department.

4.Many students answered that curriculums were unbalanced and tightly scheduled.

5.Many issues were raised from the above results for the future consideration, such as, to examine the educational program and teaching methods to improve students'practical skills and research ability in nursing, to check time schedule and curriculum, to offer places and opportunities of training and exchanging information on education for teachers to improve their teaching ability.

Keywords : Curriculum evaluation, Achievement degree Educational goal, Professional education in nursing, Nursing programs in Bachelor of Science

＊東京女子医科大学看護学部（Tokyo Women's Medical University, School of Nursing）
＊自治医科大学看護学部（Jichi Medical School, School of Nursing）

はじめに

平成11年文部科学省は大学審議会答申に基づき、これからの大学改革の方向性を打ち出し、社会のさまざまな要請に応えるためより幅の広い視点から「知の再構築」を行うことを提唱している。改革の基本理念としては、1.課題探求能力の育成（教育研究の質の向上）、2.教育研究システムの柔構造化（大学の自律性の確保）、3.責任ある意思決定と実行（組織運営体制の整備）、4.多元的な評価システムの確立（大学の個性化と教育研究の不断の改善）を掲げ、教育研究の質の向上に関わる具体的な改革方策を示すとともに、自己点検・自己評価の実施、第三者評価の推進など、教育研究活動の評価とその情報の公開を強調する提言を行っている[1)]。

一方、平成13年には文部科学省高等教育局医学教育課において「看護学教育の在り方に関する検討会」が設置され、平成14年「大学における看護実践能力の育成に向けて」という報告書が取りまとめられ、国民の要望に応じた看護サービスの提供のための大学卒業者の実践能力の向上、到達目標の明確化、学生の主体的な学習時間の確保のための教育内容の整備の必要性などが提言されている[2)]。

本学部は、平成10年に「建学の精神に基づき、変動する社会情勢の中で看護の役割を認識し、責任を自主的に果たし得る看護実践者を育成する」という教育目的のもと、6つの教育目標に基づいて特色あるカリキュラムを展開してきたが、完成年度の平成13年度を迎え、今後に向けたカリキュラムの改善のために教務委員会内にカリキュラム検討委員会を設置し、平成13年度は、現状のカリキュラム上の問題を検討するための「現状問題検討委員会」が主たる活動を行った。その活動の一環として、完成年度までの教育を評価し、特にカリキュラム改善の資料とするために、専任教員へのアンケート調査、および第一回生へのアンケート調査を行った。本稿では学生へのアンケート調査の結果について報告する。

Ⅰ．調査方法

調査は、現状問題検討委員会が作成した自記式調査用紙を用いて、無記名のアンケート調査によって行った。対象は編入生20名を含む第一回生98名であった。調査時期は2002年1月、講義終了後に対象者に調査の目的と参加は自由であること、成績評価とは無関係であることを口頭で説明し協力を依頼した。また、本調査結果は、今後の本学部のカリキュラムの改善のために公表する予定であることも説明した。調査用紙の回収は匿名性を確保するために回収ボックスへの投入とし、配布から一週間後を期限とした。

調査用紙の内容は、本学部の教育目標として打ち出されている6つの柱に関しての学生の自己評価による到達度を中心とし、その他にカリキュラム全体に関することとして、大学での学習を通しての「看護に対する関心の高まり」、「学習への取り組みの変化」、「カリキュラムの組み方や密度等」に関しての質問を加え、それぞれの質問に関する自由記述の欄も設けた。また、3年次編入学生用に独自の質問を最後に加えた。

上記の他に、大学の校舎や図書、IT関連設備などについても調査を行ったが、誌面の都合上、本稿では結果から割愛した。

なお、調査用紙には本学のカリキュラム全体が把握できる看護学部の授業科目および単位数、コマ数に関する資料を添付した。

Ⅱ．結　果

回収率は全体で91.8%（90名）、そのうち1年次からの入学生（以後1年入学生とする）は97.4%（75名）、3年次編入学生（以後編入生とする）は75%（15名）であった。

1．6つの教育目標に対する学生の到達度

それぞれの目標毎に1．全く達成しなかった、2．あまり達成しなかった、3．まあ達成した、4．十分達成したの4段階で回答してもらった。以下に目標毎にその結果を述べる。6つの目標毎の到達度は図1に、それぞれの回答に関する理由は表1に示した。

1)「豊かな人間性を養い、生活者としての人間を理解する基礎能力を養う」について

全体では「十分達成した」と「まあまあ達成した」の回答を合わせて（以後「ポジティブ回答」とする）67名（74.4%）であった（表1）。これらポジティブな回答の理由としては「教育内容が適切」が30名（44.8%）

図1　6つの目標達成度

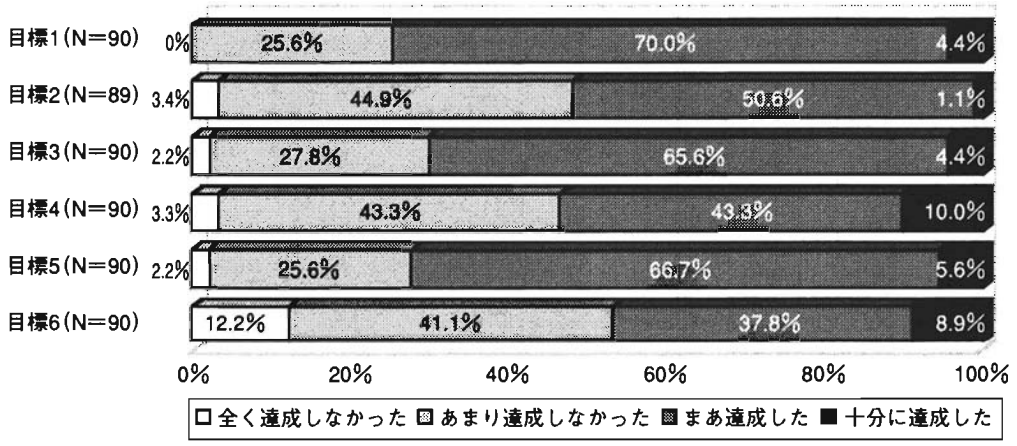


表1　回答の理由（複数回答）　人（%）

		目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6
		n=67	n=46	n=63	n=48	n=65	n=42
ポジティブ回答の理由	教科目が十分	25 (37.3)	23 (50)	27 (42.9)	10 (20.8)	22 (33.8)	12 (28.6)
	教育内容が適切	30 (44.8)	22 (47.8)	44 (69.8)	18 (37.5)	28 (43.1)	25 (59.5)
	自己学習努力が十分	10 (14.6)	11 (23.9)	9 (14.3)	24 (50.0)	17 (26.2)	6 (14.3)
	担当教員が適切	23 (34.3)	15 (32.6)	35 (55.5)	33 (68.8)	25 (38.5)	23 (54.8)
		n=23	n=43	n=27	n=42	n=25	n=48
ネガティブ回答の理由	教科目が不十分	8 (34.8)	20 (46.5)	9 (33.3)	16 (38.1)	4 (16.0)	30 (62.5)
	教育内容が不適切	6 (26.1)	14 (32.6)	6 (22.2)	14 (33.3)	4 (16.0)	9 (18.8)
	教育方法が不適切	6 (26.1)	18 (41.9)	8 (29.6)	18 (42.9)	8 (32.0)	9 (18.8)
	自己学習努力が不十分	7 (30.4)	32 (74.4)	16 (59.3)	18 (42.9)	15 (60.0)	22 (45.8)
	担当教員が不適切	2 (8.7)	6 (14.0)	3 (11.1)	8 (19.0)	1 (4.0)	2 (4.2)

で最も多く、次いで「教科目が十分である」の25名（37.3%）が多かった（表1）。自由記述には「1年次に大東町で生活したことが自分自身を成長させることができた。地域の人たちの優しさに触れ、人間的に成長できた」など学外や大東町という環境、友人関係からの学びのほか、教科（実習を含む）や教員からの学びがあったと数多く記入されていた。これに反して「全く達成しなかった」「あまり達成しなかった」というネガティブな回答（以後「ネガティブ回答」とする）は23名（25.6%）でその理由として最も多かったのは「教科目が十分ではない」8名（34.8%）、次いで「自己の学習努力が不十分」7名（30.4%）であった（表1）。自由記述では、「常に課題に追われ、豊かな心をもてない」に代表されるカリキュラムの過密性や開講時期、講義選択の幅の狭さ、「難しい」「大学が求めるものと学生の期待が一致しない」などのレベルの問題、「看護に偏りすぎ」といった講義内容や方法についての意見が記入されていた。

2)「看護実践に必要な科学的思考および看護の基本技術を身につけ、人間関係を基礎として、健康問題を解決する能力を養う」について

ポジティブ回答は46名（51.7%）、ネガティブ回答は43名（48.3%）であった。ポジティブ回答の理由としては「教科目が十分である」が23名（50.0%）で最も高く、次いで「教育内容が適切」22名（47.8%）であった。自由記述は少なく、「これから身につけたい」という意見はあったもののカリキュラムについて積極的に肯定する意見は見あたらなかった。一方ネガティブ回答の理由としては「自己の学習努力が不十分」32名（74.4%）が最も多く、次いで「教科目が十分ではない」20名（46.5%）であった。自由記述では、「講義で学んだことが実習に役立たなかった」「学年やグループによってやり方が違い混乱した」など看護過程の学習について指

摘するものが多く、その他に「1年生の看護学の先生と2年生の看護学の先生の教育の仕方の違いに混乱させられた」「技術学習のための時間や施設の活用が効果的ではなかった」という意見もあった。

3)「社会情勢の変化に応じて、保健・医療・福祉チームの中で主体的かつ協調的に看護の役割を果たすとともに、現状を変革する基礎能力を養う」について

ポジティブ回答が63名（70%）でネガティブ回答は27名（30%）であった。ポジティブ回答の理由としては「教育内容が適切」が44名（69.8%）で最も多く、次いで「担当教員が適切」35名（55.6%）であった。自由記述では「ソーシャルワーカーや介護福祉士の講義が聴けた」ことが挙げられていた。ネガティブ回答の理由としては「自己の学習努力が不十分」が16名（59.3%）で最も多く、次いで「教科目が十分ではない」9名（33.3%）であった。自由記述では、「福祉関係の人と関わる機会が少なくイメージしにくい」と、ポジティブ回答の理由とは逆の意見も記入されていた。

4)「研究の基礎能力を養う」について

ポジティブ回答が48名（53.3%）でネガティブ回答は42名（46.6%）であった。ポジティブ回答の理由としては「担当教員が適切」が38名（68.8%）で最も多く、次いで「自己の学習努力が十分だった」24名（50.0%）であった。自由記述では「○○先生の指導は大変よかった」「自分ががんばったから」と学生と教師双方の努力の成果を上げる者が多かった。ネガティブ回答の理由としては「自己の学習努力が不十分」と「教育方法が不適切」が共に18名（42.9%）であった。自由記述では、「研究方法論や疫学、統計学などの開講時期が遅く、役立てられない」という関連する教科の時期や方法に関する意見や、教員の指導力不足ということを指摘する記述もあった。

5)「専門職者として自己の能力を評価し、自己成長のできる基盤を養う」について

ポジティブ回答は65名（72.3%）、ネガティブ回答は25名（27.8%）であった。ポジティブ回答の理由としては「教育方法が適切」が31名（47.7%）で最も多く、次いで「教育内容が適切」28名（43.1%）であった。自由記述では「実習はつらかったが、先生が支えてくれた」「4年間で勉強の広げ方が少しずつわかってきたから」など自己の成長を認めるものが挙げられていた。一方、ネガティブ回答の理由としては「自己の学習努力が不十分」が15名（60.0%）で最も多く、次いで「教育方法が不適切」の8名（32.0%）であった。自由記述では、「常に短大生と比較され、自分たちはできないという思いを抱いた」「達成感がもてていない」など、自己の成長を実感できなかったり、教育側の関わりの不適切さを指摘する記述もあった。

6)「国際的な視野にたって活動できる基礎能力を養う」について

ポジティブ回答は42名（46.7%）、ネガティブ回答は48名（53.3%）であった。ポジティブ回答の理由としては「教育内容が適切」と「教育方法が適切」がともに25名（59.5%）と同数で、次いで「担当教員が適切」が23名（54.8%）であった。自由記述では、「国際関係論が充実し、意識が高められた」という記述があった。ネガティブ回答の理由としては「教科目が十分ではない」が30名（62.5%）で、次いで「自己の学習努力が不十分」が22名（45.8%）であった。自由記述では、「この目標を達成する科目は国際関係論しかない」「外国語を2カ国、それも1年ずつでは身に付かない」など関連教科の不足を指摘する記述があった。

7) 目標達成に役だった科目

6つのそれぞれの目標を達成するのに役だった科目に関して、目標毎に思いつくだけ記入してもらった結果を上位5教科まで表2に載せた。

2. カリキュラム全体について

1) 看護に対する関心の高まり

本学部での学習（講義・実習・演習など）を通して、専門科目としての看護への関心が高まったと感じているかどうかについて尋ねた。その結果は表3のごとくで、ポジティブ回答は75名（83.4%）で、ネガティブ回答は15名（16.6%）であった。ポジティブ回答の理由としては「担当教員が適切」36名（48.0%）で最も多かったが、ネガティブ回答の理由では「自己の学習努力が不十分」7名（46.7%）、「教育方法が不適切」6名（40.0%）、「教育内容が不適切」5名（33.3%）と顕著な特徴はなかった。自由記述においては「4年間を通して看護を考えることができた」「患者様との出会いなど、他学部では学べないことを学べた」という反面、「講義と実習が結

表2　目標達成に役だった教科（上位5教科）

目標1	人間援助論・音楽・コミュニケーションの理論と実際・基礎看護学・美術
目標2	基礎看護学・小児看護学各論・精神看護学・成人看護学実習・母性看護学
目標3	社会福祉学・看護管理学・ソーシャルサポートネットワーク・地域看護学・関係法規
目標4	卒業論文・研究方法論・小児看護学各論・母性看護学特論・保健医療統計学
目標5	看護管理学・実習全体・卒業論文・地域看護学実習・リエゾン精神看護 小児看護学特論・地域看護学特論
目標6	国際関係論・母性看護学・英語・看護管理学・文化人類学

表3　看護学への関心の高まりと学習への意欲的な取り組み

（複数回答）　人（%）

	理由	関心の高まり	意欲的な取り組み
ポジティブ回答の理由		75 (83.4)	80 (68.2)
	教科目が十分	31 (41.3)	18 (30.0)
	教育内容が適切	34 (45.3)	26 (43.3)
	教育方法が適切	26 (34.7)	16 (26.7)
	開講時期が適切	6 (8.0)	5 (8.3)
	自己学習努力が十分	14 (18.7)	18 (30.0)
	担当教員が適切	36 (48.0)	29 (48.3)
ネガティブ回答の理由		15 (16.6)	28 (31.8)
	教科目が不十分	1 (6.7)	4 (14.3)
	教育内容が不適切	5 (33.3)	9 (32.1)
	教育方法が不適切	6 (40.0)	11 (39.3)
	開講時期が不適切	4 (26.7)	14 (50.0)
	自己学習努力が不十分	7 (46.7)	13 (46.4)
	担当教員が不適切	2 (13.3)	7 (25.0)

びつかなかった」「テストや実習の時期が不適切で学びたいことが学べなかった」という批判的意見もあった。

2）学習への意欲的な取り組み

学生が、本学部での学習に意欲的に取り組めたかどうかについて尋ねた（表4）。意欲的に取り組めたと「思う」と「少し思う」のポジティブ回答は60名（68.2%）で「思わない」と「あまり思わない」のネガティブ回答は28名（31.8%）であった。ポジティブ回答の理由としては、「担当教員が適切」が29名（48.3%）で最も多く、ネガティブ回答の理由としては「開講時期が不適切」が14名（50.0%）で最も多かった。自由記述では「○○の実習がよかった、詳しく学ぶことができた」、「意欲的に学べる科目もあったし、教員や時期、学習内容により、意欲をなくしてしまうようなものもあった」、「入学当初は意欲的であったが、体制に不備も多く、嫌気がさしてきた」などさまざまあり、カリキュラム運営や教員の指導に批判的な意見もあった。特に編入生の自由記述には、教科の開講時期や教員の関わりに関して批判的意見が比較的多く見られた。

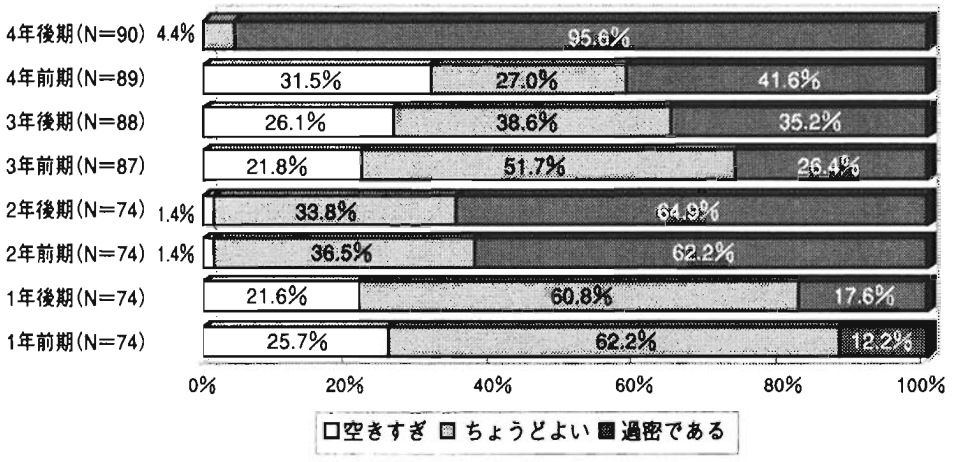
3）カリキュラムの密度について

カリキュラムの密度についての感想を4学年の前後期にわけ、「空きすぎている」「ちょうどよい」「過密である」の3段階で選択してもらった。図1のように、1年次の前後期が「空きすぎ」なのに対して4年次後期が「過密」という結果であった。また、アンケートの最後に設けたカリキュラム全体に対する意見の自由記述欄に、4年後期の過密さのため卒業論文や国家試験の準備に集中できないとする批判的意見があった。

4）編入生の独自のカリキュラムについて

編入生独自のカリキュラムの必要性について編入生のみに質問した。回答した15名中10名が「一部独自のカリキュラムがよい」と回答し、残り5名は「全く独自のカリキュラムがよい」と回答した。

図2　カリキュラムの密度



5）カリキュラムへの総合満足度

カリキュラム全体に対する学生の満足度をパーセント値で記入してもらった。1年入学生の平均は51.7%（SD=18.2）で、編入生の平均は50.3%（SD=18.2）で、全体の平均が51.5%（SD=18.1）であった。

Ⅲ．考　察

今回、第一回生に対して提供された本学部の教育カリキュラムに対する評価を、教育目標の到達度に関する学生の自己評価という方法を中心に行った。学生の到達度はカリキュラム評価において重要な項目の1つであり、日頃の成績評価など教員側からの評価や、国家試験の合格率、卒業後の雇用者による満足度の評価などさまざまな方法があるが[3) 4)]、学生による評価をフィードバックとして受け止め、教育改善に努めていく姿勢は、近年とみに教育者に求められるところである[5)]。

以下、学生の教育目標に対する到達度の自己評価の結果と、カリキュラム全体に対する評価の結果に分け、それぞれについて考察を進める。

1．学生の教育目標の到達度に関する自己評価ー到達度が「比較的高い目標」と「比較的低い目標」についてー

60%以上の学生がポジティブな回答をしたのは目標の1．3．5であり、学生は「豊かな人間性を養い、生活者として人間を理解する」、「チーム医療において主体的かつ協調的に看護の役割を果たす」、「専門職者として自己の能力を評価し、自己成長の基盤を養う」という面に関しての到達度は高いと感じていることがわかった。これらの目標の到達度が比較的高いと評価されたことは、本学部の教育が、豊かな人間性や、保健・医療・福祉を幅広く捉える視点、専門職業人としての自己成長の基盤を養うということに貢献したことを示唆するものである。冒頭で述べた文部科学省の「大学改革」においても、大学教育における「教養教育」、「専門教育における基礎基本」の重視は強調されるところであり、今回の調査結果を見る限り、変化の激しい時代において、多様な価値観を持った人々に看護を柔軟に提供するとともに現状を変革する素地をもった人材の育成に、本学部の教育が多少なりとも貢献したと考えることができるであろう。このような豊かな人間性、幅広い視野、自己成長の基盤には、教科目の適切性とともに、大東キャンパスという教育環境も貢献していることが学生の自由記述からも伺うことができた。

一方、比較的ポジティブな回答が少なかったのは、目標の2．4．6であり、学生は「看護に必要な科学的思考や実践能力」、「研究の基礎能力」、「国際的な視野に立った活動の基礎能力」の到達度が低いと感じていることがわかった。「建学の精神に基づき、変動する社会情勢の中で看護の役割を認識し、責任を自主的に果たし得る看護実践者を育成する」という本学部の教育目的に照らし合わせたとき、半数をわずかに上回る学生しか目標2を達成したと考えていないということは、

深刻に受け止めなければならない事実であろう。看護の実践能力の重視は、「看護学教育の在り方に関する検討会」報告書でも強調されるところであり、この目標の到達度が比較的低いと評価されたことは、本学のカリキュラムを改善する上で今後特に重視しなければならない点であるといえよう。学生が挙げた最多の理由は「自己の学習努力の不足」であるが一方、ネガティブ理由の自由記載には数多くの不満や批判的意見が記入されており、その中には、「短大生と比較されてできないことを強調されたり」、「教員同士の情報交換や共有が少なくその狭間で学生が混乱したこと」など、不適切な指導者側の関わりにより、学生が混乱し自信をもてなかった様子が伺えた。このような学生の自由記述からは、教員の関わりの重要性が当然のことながら示唆される。ほかに、講義と実習とのつながりをつけるなど教育内容や方法の工夫のほか、各専門領域内での指導方法の統一や、専門領域間の教育内容の情報交換、さらに技術教育の充実の必要性なども示唆される。これらについては完成年度に至る間に、学内で問題意識が共有され、すでに改善の取り組みがなされている点も多々あるが、今後も引き続き改善を重ねていくことが必要であるといえよう。なお、本学部1回生が入学した時点では短期大学の2学年と3学年の学生が在学しており、同じ校舎の中で教育目標の異なる2つの教育課程が、両方の教育を兼担する教員によって同時に行われていたということがある。このような条件下で行われる教育のデメリットを、どのように克服するかという問題に関する学内の検討が不足していたことも指摘できるであろう。

「研究の基礎能力」については、保健医療統計学や疫学の開講時期を適切にするなど、カリキュラムの構造上の改善とともに、教員の指導能力の向上も含めた教育内容や方法の改善が要請されているといえるであろう（なお、本調査の対象となった一回生は卒業論文の提出後の1月に保健医療統計学の講義が行われており、早急に改善すべき課題として検討され、2回生からは4年次前期までに終了するよう改善された）。

さらに「国際的な視野」については、一回生においては、現在「国際看護」と「英語Ⅳ」において行われているハワイ大学短期研修が4年次においてようやく参加できるようになったということもあり、国際関連の教科の準備が遅れたこともその一因となっていると推測できる。時代的要請からみても、今後さらに国際的視野を養う教科を充実させていくと同時に、各教科の中でこの目標を意識した構成を工夫することも必要であるといえよう。

なお、どの目標に関しても到達度が低い理由の上位に「自己の学習努力の不足」があげられており、この調査が教育内容や方法の評価に加え、学生にとっても自己評価の機会となっていることが伺えた。

2. カリキュラム全体に対する評価について

①「看護に関する関心の高まり」と「学習への意欲的な取り組み」について

本調査結果を見る限り、学生は「看護に関する関心の高まり」、「学習への意欲的な取り組み」については、比較的高い評価をしていることがわかる。この結果から学生自身は本学部での学習に自ら意欲的に取り組み、看護への関心を高めたといえるであろう。またその学びは、教室での学びだけでなく「患者様との出会い」など実習を通して得た部分が多かったことも自由記述から推測できた。一方意欲的に取り組めなかった理由として、「開講時期が不適切であった」とする回答が最も多かった点からは、各教科の開講時期を見直し、適切なものとする必要性が示唆される。

②カリキュラムの過密さとアンバランス

結果から、学生はカリキュラムの密度をアンバランスであると感じ、特に4年次後期が過密であると感じていることがわかった。可能な教科から他の時期に移動するなど、カリキュラムの密度を平均化するとことは、早期に解決すべき課題であるといえる。なお、本調査が、4年次後期の科目や試験が進行中で、かつ国家試験を1ヶ月後に控えた時期という、対象学生が精神的に最も焦っていた時期に実施されたことも、結果に多少影響した可能性があることも考慮する必要があるであろう。

また、「余裕がない」「看護に偏っている」など学生の自由記述からも、全体にカリキュラムが過密で専門科目に偏っていることが指摘される。看護学の学士課程においては、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に示される教育内容の充足と、大学設置基準の大学卒業要件を満たすという2つの規制に基づいて教育内容が決められるため、必修科目・選択必修科目が多く、時間割が過密になることは、本学に限らず従来から指摘されている点である。「看護学教育の在り方に関する

検討会報告書」においても、この点は問題として指摘されており、改善の方策として、学生の主体的な学習を促し、自主学習の時間を確保するために、教育内容を精選することの必要性が提言されている。

本学においても、担当教員間の情報交換やカリキュラムの全体的見直しを行い、講義・演習時間を整理・検討し、講義内容の重複を避けた合理的なカリキュラム構築を行うこと、さらには看護の領域を越えた幅広い内容を取り入れた創造的な教科目の設置が課題であるといえよう。

③大東キャンパスについて

本学部の教育の大きな特色のひとつとして、1年次と4年次の教育の一部が大東キャンパスにおいて行われている点が挙げられる。このことが本学部の教育目標のひとつである学生の人間形成や人間理解に結びついていることは、学生の記述からも伺えた。しかし、特に一回生においては、学部開設当初ということもあり、大東キャンパスと河田町キャンパスの距離がもたらす教育運営上の困難に伴い、教育内容や方法に関する教員間のコンセンサスの不足という弊害も学生の記述から伺うことができた。2つのキャンパスを有機的に結び、それぞれの特徴を生かしながらも一貫性のある充実した教育が行われるよう教科目の構成や教育運営の方法についてさらに検討を重ねていくことが必要であるといえよう。

おわりに

学生の自己評価による到達度は目標によって違いがあったが、学生自身が意欲を持って学習し、看護への関心の高まりを体験したことをうかがい知ることができた。一方、カリキュラムに対する総合満足度は50%代と厳しいものであった。本調査を通して、教育の質を向上させるために改善すべき点として、大きくは、カリキュラムの過密さや開講時期の不適切さといったカリキュラム構造上の問題と、教員間の連携や学生への教育的関わりといった教育運営上の問題の2点があることが明らかになった。現状問題検討委員会では、今回の一回生からの貴重な回答結果も参考とし、よりよいカリキュラムづくりに励んでいきたいと考えている。しかしながら、カリキュラム構造上の問題は、カリキュラムの見直しと改正によってある程度改善していくことは可能と思えるが、教育活動、教育方法など個々の教員の教育能力や、組織としての教育の運営方法に関する問題は、また異なったアプローチで今後取り組んでいかなければならない課題であるといえる。教員の教育能力の向上のための研修や、学内での教育に関する情報交換や討議の場の設定、学生からの教育評価の導入など、faculty development のための新たなる課題も示唆されたといえよう。

引用文献

1) 文部省高等教育局：大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」, 1999.
2) 看護学教育の在り方に関する検討会報告：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 2002.
3) MARILYN H.OERMAN,KATHLEEN B.GABERSON：Evaiuation and Testing in Nursing Education1998、舟島なをみ, 看護学教育における講義・演習・実習の評価 ,pp283, 医学書院 ,2001.
4) 杉森みど里：看護教育学第3版 ,pp127, 医学書院 1999.
5) 杉森みど里：看護教育学第3版 ,pp282, 医学書院 1999.
6) M. Mizote, H. Matuzaki, and M. Kume, "Respiratory effect to heartbeat fluctuations in neonates", 2001 Conf. Proc. 23rd Annual International Conf. IEEE/EMBS, vol. 1, pp. 537-539, 2001.